単元の言語活動１
声に出して古文を読む

活動のねらい

最初の単元なので、滑らかな音読ができるようになることを第一の目的としている。

現代語でもよく聞いてみると文字と発音とが一致していない箇所がある。しかし、現代仮名遣いはなるべく発音に沿う仮名遣いを目指している。いっぽう、歴史的仮名遣いでは表記通りに発音しない場合が多くあり、その文字と発音とのルールを理解した上で、正しく読むことが滑らかな音読のためには必要である。また、正しく読むことによって意味が分かりやすくなる場合も多い。

古文を読むことに慣れることが今回の活動のねらいであり、さらに、正しい読みかどうかを生徒たち自身で判断することにより、ルールに習熟しやすくなることもねらいのひとつである。

タイトル・序文の解説

まず、現代語から文字と発音とが異なる場合があることに気づかせる。ふだん、何気なく使っている言葉も吟味してみると、実は文字通りに発音していないことが分かる。文字と発音との関係に注目させることから課題へ近づくことができる。現代語を手がかりとして、古文において文字と表記が異なる箇所を正確に読めるようにしなければならないことが重要であると認識させるとよい。

「課題」の解説

課題　**「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を、声に出して読んでみよう。**

この活動は古文の表記を正確に音読することを目的としている。特に声を出すことで自分自身の読みを確認したり、他の生徒が、読んでいる生徒の読みを確認したりできるようにすることを重視している。それぞれの教材の読解を終え、内容が理解できている前提で、一つ一つの言葉を大切にして、意味が分かるように区切り、発音することを意識しながら音読する。

「活動」の解説

1　「古文を読むために1」（一八ページ）の1歴史的仮名遣いの読み方のルール1〜4に当てはまる箇所を「児のそら寝」（一六〜一七ページ）「絵仏師良秀」（二〇〜二一ページ）「大江山」（二四〜二五ページ）の本文から、それぞれ指摘してみよう。

「古文を読むために1」（一八～一九ページ）に基づいて、古文を読む際に注意しなければならないルールとそのルールを適用する本文箇所をチェックする。ルビになっているところもルールの適用箇所かどうかを確認する。

チェックする際に蛍光ペンなどを利用し、1～4のルールごとに色分けなどしながら、ルールに習熟するようにする。慣れてきたら色分けせず、適用箇所だけ分かるようにするなど徐々に何もなくても正確に読めるようにする。知技(1)ウ・(2)ウ

この作業の際に正確に読めると意味が理解できる語に留意しておき、現代語とのつながりを意識するとよい。知技(2)エ

例　宵（よひ→ヨイ）　申す（まうす→モース）
　　一声（ひとこゑ→ヒトコエ）

このようにすると正確に読むことが文脈の理解につながることがよく分かってくる。

▼評価のポイント▲机間巡視をしながら、教科書を確認し、チェックすべき箇所がチェックされているか、適切なルールを適用しているか、確認する。あらかじめチェックした本文をＰＣで作成しておき、プロジェクターに写して自己確認させる、解答のプリントを作成しておき配布するなどの方法も取ることができる。

2　「古文を読むために1」の1歴史的仮名遣いの読み方のルール5に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘してみよう。

・その際に、1のルールと5のルールを二段階に用いている箇所に気をつける。

1でチェックした箇所と重なるので、該当箇所だけを検討していけばよい。

例　1 1 言ふ（いふ→イウ）　2（イウ→ユー）
　　1 1 笑ふ（わらふ→ワラウ）　2（ワラウ→ワロー）

煩雑な作業になるが、正確に発音すると現代語でも表記と発音が異なる箇所が該当しており、現代語としても自然な発音となっていることが分かる。また、古文特有の語は分かりにくい場合があることに留意させると本文読解時の語釈と結びつけることができる。知技(2)エ

例　なんでふ→ナンデウ→ナンジョー

3　グループを作り、「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を間違えた箇所で交代しながら、順に音読してみよう。

グループでひとりずつ、説話三教材を順番に音読する。その際に聞いている生徒は間違えを聞き逃さないようにし、間違えたらそこで交代するというゲーム的な要素を取り入れて、楽しみながら音読の練習ができるようにすることもできる。誰も間違わなかった場合は全員が三教材とも読むことになる。滑らかな音読の場合、内容の理解もしやすくなることをそれぞれが実感できることが望ましい。知技(1)アエ　思判表B(1)アウ

▼評価のポイント▲それぞれのグループで一番長く読むことがで

きた生徒に高い評価を与える。また、グループ代表をクラス全員の前で再度三教材を間違えないように読ませ、聞いている生徒に間違いを聞き取らせることを試みてもよい。できれば全員が古文の読み方のルールに従って古文を正確にかつ滑らかに読むことができるようになりたい。そしてこの先の教材も正確に読むことができるようになるとよい。

（畠山　俊）

主態

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔知識・技能〕⑴エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴ア　「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴ウ　「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。
〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで説話のおもしろさを味わい、文語のきまりを理解し、古文に親しみ、歴史的仮名遣いの読み方を理解し、今までの学習を生かして、古文を音読しようとしている。
◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑵ア